

香川大学経済論叢 第82巻 第1・2号抜刷 2009年9月

「僕はハレド・ケルカル」

—— テロ容疑者になった移民の若者のライフストーリー ——

園 部 裕 子

翻 訳

「僕はハレド・ケルカル」

—— テロ容疑者になった移民の若者のライフストーリー ——

園 部 裕 子

【以下の文章は、1995年にフランスで連続テロ事件が起こった際、容疑者とされた青年、ハレド・ケルカルへのインタビューの全訳である。一連のテロ事件が起こるちょうど3年前、フランスに留学していたドイツ人社会学者ロホは、博士論文の準備のため、青年の出身地でもあるリヨン郊外で社会調査を行っていた。事件が起こった後、ロホは自分が現地の若者に対して行ったインタビューのなかに、容疑者ケルカルへの聞き取りを見つけた。ケルカルが警察と機動隊による追跡の末に射殺された後、ロホが聞き取りの全文をフランス紙ル・モンドに寄稿した。以下、*はロホによる質問、-の後に回答、()はロホによる補足、[]は訳者による補足説明である。なお、全文の翻訳・投稿には、ル・モンド紙の許可を得ている。】

1992年10月3日ヴォー・アン・ヴランにて、ディエトマール・ロホによるインタビュー、*Le Monde*, le 7 octobre 1995, p. 10-12.

—僕はアルジェリアで生まれて、2歳の時にフランスに来た。ヴォー・アン・ヴランで生活して、そこで良い小学校を出た。成績もままずまずつだったし、良かったとすらいえる。それから、レ・ノワレット中学校へ行ったんだけど、僕が最初に悪さをするようになったのはそこでだった。中学校ではいろいろ[学生が]混じっていて、ZUP[都市政策対象地区]のやつとか、村のやつとかで、ふざけ合っていた。最初の悪さしたのは、授業中にメモを回すようになったこととか、システムD[要領よくやること]だ…。教師と生徒の間では、良い理解があった。不均質な集団だったけど、みんな同じメンタリティーを持っていて、ほとんど話はしなかったけど、でもすぐに理解でき

たし、それが良かった。でも僕が一人で、学校を変えたとき、そこはもうそんなじゃなかった。このメンタリティーにもう出会うことはなかったんだ。

*それは何、正確に、そのメンタリティーとは？

—勉強したり、ふざけ合ったりしていた。成績が良くて、いつも真面目だったから、ふざけることができたんだ。でも高校に来たとき、もうそこはそんな感じではなくて、そのことが気に入らなかった。ついていけなかった。

—僕は成功する能力があったと思う。でも自分の場所がなかったんだ、なぜなら僕は、完全な統合なんて不可能だ、と思っていたから。自分の文化を忘れてたり、豚を食べたり、そんなことできない。彼ら [高校の生徒] は、自分のクラスにアラブ人なんていたことがなかったんだ、彼らが率直に言っていたようにね。お前はたった一人のアラブ人だ、って。やつらが僕のことを知ったとき、言ったもんだ、「君は例外だ」って。彼らは、彼ら同士の間の方が、議論しやすかったみたいだ。

—僕は、勉強したりふざけ合ったりするのが好きだった、だって、バランスがとれるからね。いつも真面目、真面目ばかりではなく。僕はふざけるのが好きだから。でも [高校では] そんなふうではなかった。少し冷たかった。僕が喋っても、僕が彼らとよく理解しあえたとしても、それは自然ではなかった。僕の誇りはなくなっていったし、僕自身の個性なんてものも、脇においておかないといけなかった。そんなことできない、それで僕は居場所が見つけられなかった。で、僕は授業をサボるようになった、一回、二回。それは連鎖的なんだ、ある日、あっちやこっちでいろんな出会いをするようになるまで。こう誘われたんだ、「良いことがあるんだ」って。一連の連鎖があって、カチツという音がそこでしたんだ。[通っていたのは] 良い高校だった。入学するにはかなり良い成績が必要だった。中学三年の時、僕は成績が良かった。[ある一人の友人とともに] クラスのトップの方にいた。それもふざけながら。健康的で、落ち着いていて、でもあそこ [高校] では、そうではなかった。

*中学では、こういう偏見はなかったの？

—全然、なかった。うん、フランス人たちが同じ行動原則をもってなかったってこと

は確かだよ。それでも彼らは適応しようとしたし、僕らも適応していた、そんなに違
いっていうものは感じなかった。中学では助けることは喜びでもあった。でも高校で
はそうではなかった。[まるで] あなたには記憶に穴があって、彼らはあなたに何も
言わない、彼らは[あなたの知らないことを]隠している。僕にとって、それが始まっ
たのはあそこだった。僕は授業に行かないようになり始めた。午後、みんなが学校
に行く。僕には何もすることがない。それでぶらぶらし始めた、それでいろいろの人
と知り合った。でもやつら良いやつなんだ。ある男が**かっばらい**だったとしても、やっ
てくるときにそう見たりはしない。友人だとしたら、友人だ、それは感情の問題なん
だ。これこれと、ある行動ごとに判断したりしない。だってここでは70%の若者は
かっばらいをするんだから。だって両親たちは、6人も子どもがいたら、できないさ
…ある男が他の人みたいな格好いいジーンズを買いたくて、でもお金がない。彼は一
人でなんとかしなくちゃいけなくなる。

ーさて、僕は彼らとぶらつき始めた。高校の雰囲気と、外の、**かっばらい**の雰囲気
と、違いが分かる。もっと気楽だった、中学と同じメンタリティーだった、でも大人
とだよ。盗みを働いたら、自由に感じるさ、だってそれはゲームだから。捕まりさえ
しなければ、勝つのは僕だ。これはゲームだ。負けるか、勝つかの。でも確かに、こ
ういう道をたどったとしても、どこかにたどり着くわけじゃない。

ー刑務所に行ってから、僕は100%、自分が敗者だってことが分かった。よく分かっ
たんだ。でも僕は後悔しないと思った。すでにやってしまったことを後悔なんてでき
ない。刑務所でたくさんのことを学んだことも分かっている。特に生活、集団生活だ。
自分の言葉だって学んだよ。房で一人のムスリムと一緒にだったんだ。こんなふうに分
かるようになった、「僕はいったいここで何をしているんだ？」って。すべてが遠
ざかった。それで人生を学んだ…もっと単純な風にはなくて、もっと一貫性をもっ
た風に。今、テレビで見ることに対して、以前と同じような反応をしないんだ。以前
は、何かテレビで見たとき、僕はそれに対して返答したかった。でも今は、暴力に
よって返答することはしない。今は、こいつらに対して哀れみを持っているよ。前は、
僕は衝動的だった、そうならざるをえなかった。

***以前は何が重要だった？**

—自分自身でいるという自由，良い友だちと一緒にいる自由，理解し合うこと，グループ，よく結束したグループ。特にそれだったな。ふざけ合っていた。ぴったりメンタリティーの合うフランス人だって一人いたよ。勇敢で，はっきりいって尊敬できるやつだった。他のフランス人とは何の関係もない，こいつは。彼は僕らの文化を学んだんだ，精神的なレベルで，それを実践することなく。自分自身を尊敬する人間は，必ず他の人間を尊敬するんだ。彼はここで自分自身についての認識を得たんだ。

***中学と高校では，教師と学生との間ではどうだった？**

—中学では本当に良かった。教師たちは，僕らがきちんと勉強しているから，ふざけても良いってことを知っていた。僕らに少し自由を与えて，授業で5分間，喋ったり，ふざけたりさせてくれた。でも勉強する時は，していたんだ。中学では，教師たちは僕らの価値観を承認してくれていた。僕らに価値があるってことを知っていたし，僕らに限界があるってことも知っていた。でも高校では，僕は後退したと感じた。それは人のせいだ。人とのコンタクトがなかった，教師たちとだってなかった。—彼らはやってきて，授業を始める，終わりまで止まらない。「はい，さよなら！」だ。中学では，教師たちともっとコンタクトがあった。でもそれは僕らみたいな生徒がたくさんいたからだ。先生たちは僕らの兄弟とか姉妹も担当していた。彼らは僕らの面倒を続けて見ていたし，僕らを知ってもいた。でも高校では，先生たちは僕らのことを知らないし，僕らをすぐにカテゴリー化して見るんだ。僕は自分の場所が見つからなくて，気分が悪かった。こんな風を感じるようにもなった，「僕はいったいここで何をしてるんだ？」って。「まあいいさ，お前のためだ，勉強するためだ」って思う代わりに。高校では僕のクラスには，金持ちしかいなかった。

***で，君の両親は？**

—僕の両親は，毎日，僕に言った。「勉強しろ，お前は成功しなくちゃいけない」って。母は僕のことを誇りに思っていたけど，それは僕には辛かった。学校を辞めたとき，母は，家族全員は，それを望んでたさ！ ああホントだよ！ 僕は完全に家族か

ら切り離されたって感じた。僕が本当にひねくれていったのはそこからだった。ある時、自宅から飛び出したりもした、だって母がそれを望んだからね。「いったいどうして、お前はそこまでとり着いたのに、今じゃもう学校に行きたくないって言うんだい？」僕にとっては、母がいつもくどくど言うことについて、自分自身が間違っているということが分かっていた。でもだからこそ、家を出たんだ、間違っていることが分かっていたから。でも長くは出なかった。1週間、友だちの家に泊まっていたんだ。

*姉妹や兄弟とはどんなふうだった？

ー僕んところでは、特に父と兄弟だ。兄は僕に助言をくれた。それである日、本当に僕が道を誤った時、「そんなんじゃダメだ！」って言った。それが心に響いたし、同時に気が悪くなりもした。その時に家を出たんだ。それで、自分自身を頼らなくてはならなくなった。盗まなければいけなくなった。でもまず、復讐するためだった。あなたたち暴力が見たいんですか、じゃあ暴力をふるってあげましょう。暴力がある時だけ僕らのことを話題にするんだから、だったら暴力をふるってやるさ。僕らにとって、個人的なレベルなんだ。青春期って、迷うんだ、どこへ行って良いのかよく分からない。選択しなくてはいけないのはその青春期なんだ。それで中学から高校に移る段階に来たときも、それもすでに選択なんだ、メンタリティーの変換だ。選択しなくてはいけない。でも僕らは若い。「これは、良くない」とは言えないんだ。倫理観があんまりないんだから。その結果、より楽に感じる所へ行こうとするんだ。僕は個人的な暴力で返事をした。

ーでもマ・デュ・トロの時 [1990年にヴォー・アン・ヴランで激しい暴力が起こった時]、あれはまさにこういう若者たちの集まりだったんだ。キレたのは、殺人事件だって問題じゃなかった。まさに火薬庫だったんだ。あれは、失業しているすべての人間がこう言いたかっただけなんだ、「ストップ！ 僕らのことを考えてくれ！ あんたたちは都会で良い生活を送っているみたいだけど、でもちょっと郊外で起こっていることを、貧困を、ドラッグを、よく見てくれよ。」って。14歳とか15歳とかの若者がいて、彼らがでっかい車を盗んで社会を、警察を困らせに行く。それは本当に

もううんざりだ、っていうことなんだ。(…) 若者たちが探しているのは、仕事だ。なぜやつらは若者に仕事を与えないんだ、若者たちが上手くやってけるように。やつらが理解し始めるのは暴動が起こってからだ。でも暴力なんてのは大したことじゃない、「僕らはここにいる」って言っているんだ。

*君の地区にはエスニックな集団はある？

—確かに黒人はだいたいいつも黒人と一緒にいるな。でも黒人が何か必要とする時は、アラブ人と違ってホントによく話すよ。でもそうでなきゃ、黒人は一緒に集まっている。アラブとポルトガル人の方も、一緒に連なってるな。

—ヴォー・アン・ヴランには人種差別がある。それ [人種差別をする人間] は ZUP に住んでいるやつじゃない。結構、シックな地区に住んでいるやつらだ。それは仕事しているやつだ、彼らが言うように、適応しているっていうやつらだ。こいつらは、よくやっている。彼らの息子たちもよくやっている。息子たちは学位を取得して、父親がやつに車を買ってやり、免許も与える。やつは欲しいものは何でも持っている。でもその若者はね、そんなものを手に入れたら、都会に行くんだ。格好良い車で、若いフランス人に会いに行く。僕は22歳だけど、免許だって持っていない。僕には何にもないんだ。そりゃ辛いよ (…)

—青春期にある若者たちってのは、火薬庫なんだ、なぜなら彼らは僕らよりたくさんのことを見ているからね。今、もっと若いやつらは、早くこういうことを見るし理解するさ。12歳とかで彼らはすでに感じているよ。僕は12歳の時は、それが何を意味するのか、システムってやつとか、お金とかいろいろ、経済システムってものが何を意味するのかよく知らなかった。今の12歳の若者はそれが分かっている、僕らが17歳とか18歳とかで感じたような、一種の障壁みたいなものに、もうぶつかっているんだ。だからもっと早く反応するだろうね。彼らは、ギャング団を作ろうとしているよ。

*勉強をしている若者と、失業していたり、盗みをはたらいている若者との間に付き合いはあるの？

—いつも助け合いがある。僕らはいつも人を指導したり、助言したりしようとしているんだ…僕らの間ではいつも人の話を聞いてやるんだ。誰かが僕らのいうことを聞かなくなったら、僕ら同士で話し合う。少なくとも、それが尊敬だ。ドラッグをやっているやつも、あなたのいうことを聞くだろう。やつに話してやって、そいつが一人で自覚する必要がある。そいつはドラッグをやればやるほど曲がっていくし、だんだん他の人びととの関係もなくなる。自分の親友とも理解し合えなくなって、人を騙すようになる。それで終わりだ、やつは拒絶される。リンゴみたいなものだ。他にきれいなリンゴがあるお皿に、腐ったリンゴを置くんだ」

—もし自分の地区のやつがドラッグをやったら、僕はそいつを強制的にでも看病して、地下室に押し込める。食べ物とか飲み物とかを持って行ってやる。コカインへの欲求がなくなるといけない。そいつが苦しんでいようが、だ。僕はドラッグをやっているやつと刑務所にいたんだ。1年間、そいつと一緒にだった。1年間、僕は彼に宗教的な質問をしていた。なぜなら、僕はイスラムが好きだからね、それからドラッグの話もした。やつに言ったんだ、「ドラッグなんかやってはいけない、君の健康を望むやつは君にコカインなんかやらせたりしない」、って。そういうやつらは、はね返さないといけないし、一緒にいたりしてはいけない、って。コカインをやっているやつと一緒にいたら、君も必然的にやるはめになるだろう。

—僕らは喋った、たくさん、そいつが出所するまで。そいつは二度とドラッグをやらなかった。ほら、こうやって助け合うんだ。助け合っているうちに、関係ができてきた、っていう気持ちがあるんだ。そうしたら僕は「あいつはオレの兄弟だ」って言うだろうな。

*** 高校で失望してから、刑務所に入るまで、何があったの？**

—高校では僕は自分の居場所を見つけることができなかった。それで始まったんだ。盗み、たむろして。盗むことで、金儲けができることが分かった。それで毎回、悪さがエスカレートするんだ。もしその間に取り戻せなければ、そいつはギャング団になる。1年経ったら、そいつは武器をとるんだ。(ケルカルはあるフランス人の若者と

の出会いについて語る) ある男が僕らに言った「はっきりいって、僕は仕事もしたけれど、でも違う、僕はただひとつ、盗むことしかできない…」僕らは僕ら同士で尊敬し合って、僕ら自身のシステムを作り上げた。僕は車の中にいたら、自由な気がした。警察かどうかなんてどうでもいい。僕にとって警察なんて、何でもない。もし後ろに警察がいたら、アクセルを踏んでしまえば、終わりだ。無我夢中だよ、ゲームだ、気持ちよかった。

—高校の後はそうじゃなかった。良くなかった。刑務所に入った日は、うん、母親が息子をほうっておけないってのは本当だ。母が会いに来たんだ。そうして「分かった？確かに友だちは必要だけど、お前のことを考えなさい、お前の将来のことを。もう22歳なんだから」って。信じてくれ、母にこう言われたんだ、「20歳からは、時間は本当にすぐ過ぎるんだよ。お前の将来が私には見えないよ」って。

—それで知ってるでしょう、刑務所では考えることしかできないんだ。僕はあまりたくさん考えることはできなかった。確かに、母や父が言ったことは全部分かっていた…でも納得するのは後になってからでしかないんだ、だってその時は演技をしている役者だからね。それで刑務所では突然、見物人だ。「僕らはもう生きているのではない、僕はなにをしているんだ？」って考えるんだ。それで疑問に思う、「僕は人生において何をしよう」って。疑問の連鎖だ。ひとつ答えを見つけるだろ、でもその答えっていうのはいつも、前に両親が言ったことだ。なぜなら彼らはそこをもう通ってきたんだから。両親は経験して、知っているんだ。

*なぜ刑務所に入ったの？

—店を壊して、雄羊車ってやつをやってたんだ。商店に突っ込んで、中にあるモノを全部とって、車に乗って、逃げて、売るんだ。やつらが一人捕まえて、そいつは僕の友だちで、フン！彼が全部喋りやがった、汚いやつだ。でも僕ら仲が良かった。彼はアパルトマンを持っていた。でも僕は、それはマシだったと思った。なぜなら、考えてごらんよ、もし僕がそこ(刑務所)を通過してこなかったら、他に何をしたら思

う？ 明らかだ、10年とか20年とか刑務所にいることになっていたはずだ…。

正直に言って、アラブ人として、司法は僕らのことが気に入らないんだ。ダブル・バインドの司法がある。ヴォー・アン・ヴランのやつは捕まったら、他のやつより1年半以上余計に[刑を]食らうんだ、それは確かだ。僕にとっては、裁きなんてない。彼らが司法と呼ぶものは、不正義⁽¹⁾だ。

*司法とはどんなふうだった？

—正直に言って、アラブ人として、司法は僕らのことが気に入らないんだ。ダブル・バインドの司法がある。一つ話をしよう。僕は啞然としたんだ。僕は条件付き期間を過ごしていた。泥棒したせいで捕まった二人の男がいた。フランス人とアラブ人。二人ともそれまで有罪判決を受けたことはなかった。フランス人は中に入って、女を殴って、全部奪った。隣の女性がそいつを見ていて、警察がやってきてそいつは捕まった。アラブ人はただ家に侵入しようとしただけだ。裁判官は、フランス人は2ヶ月で、アラブ人は、玄関を打ち破ったりすらしなかったのに、18ヶ月だと言った。それを見ていたやつは「何だって？ 今じゃ、ヴォー・アン・ヴランのやつは捕まったら他の人間より1年半以上余計に受けるのは、確かだ」って思う。こんな人間たちは刑務所にぶちこまないとイケない。やつらを静かにさせないとって。でも彼ら（裁判官、社会）は、それが彼ら自身の間違いだってことを知らないんだ。彼らがシテで起こっていることをちょっとでも見ていれば、こんな非行なんてあるはずがないんだ。僕にとって裁きなんてない。彼らが司法と呼ぶものは、不正義だ。

*刑務所ではどうだった？

—何も問題なかったよ（…）。何人か知り合いができただけで、50%は元気が戻る（…）。僕は個人的には、みんなと一緒にだった、僕は人とコンタクトをとったり笑いあ

(1) フランス語では、「司法」を意味する単語 la justice には、「正義」の意味もある。ケルカルはフランス語で l'injustice と言っているが、一般的な日本語訳「不正、不公平」ではなく、あえて「正義」の反対という意味で「不正義」と訳した。

うことが好きなんだ。聞抜けなやつだろうが、どうだっていい。こんにちとは言って、笑いあって、それだけ！ 若者は、刑務所に入った若者は、未成年で、それから成人するやつらだ。未成年だと、集団を形成して、成人したら、皆、再び会う（…）。

一ずる賢いやつは「僕はやつらと一緒にいてはいけないんだ、もしここから出ようとするなら」って思う。（…）もし誰かがこういうやつらと一緒にいたら、刑務所を出たその日に盗みに入るのは確かだ。もしそいつが想像力を働かせたら、「いや違う！もしここから出たかったら、こいつらと一緒にいなければ」と思うだろう。でもそれは、彼がそいつらに挨拶しないと、完全に追い払うことを意味する訳ではない。僕は頭の中で「もうやめなくては」と思った。僕は、静かなところに行った。静かな人たちがいるところに。（会話はケルカルの学校時代に戻り、次に刑務所に入る直前の時期に戻る）やつら僕を退学させたんだ、これこれ、僕は学校を退学しましたって。それから2ヶ月間、ぶらぶらしていた。その後で捕まったんだ。それで刑務所で過ごした。[条件付き] 猶予で出た。働いた。仕事している時は、良かった、化学分野にいたんだ、完璧だ。契約が終わったら、また次の契約を見つけた。そこでもまた3ヶ月。また刑務所に入るってことが分かっているながらね。判決のために呼ばれる日に、また戻るっていう気がしていた。僕は良いところを見つけた。少なくとも、1ヶ月で102万稼いだ。僕は化学者でもあった。「これは僕の人生のチャンスだ、働こう。もう誰にも何も求めないぞ、僕は家族にたくさん与えて、たくさん蓄えて、少し服を買って着ることができたら、ちょっと外出しよう」と思った。僕はすべてを手に入れていた、頭の中ではちゃんと整理されていた。そこに1週間いたんだ。

それから、最初の判決だ。僕は自由の身になっていたんで、なぜって猶予期間だったから。判決が下される時、僕は出かけていった。「今、刑務所に行きたくない」って思った。さて、やつら僕に刑を言い渡した。30ヶ月だ。それから僕はまた判決を受けた、僕が上告したからだ。でもその後、やつらは逮捕状を出したんだ、刑務所に連れて行け！って。それで僕は上告した。

一でも警察は絶対に僕に会いに家に来たりしないんだ。ヴォー・アン・ヴランの警察は、彼らが僕を追いかけて、僕を捕まえるはずだったのに、できなかったという報告書を書いた。でもそれは本当のことじゃない、彼らが僕を探しに3回も家に来たのに

僕がいなかったなんて。それは本当じゃない。やつらは嘘の報告を書いたんだ。それが僕にとっての汚点になった。裁判官は、えらく満足して「あなたは4年の禁固刑を受けました」って言った。僕はこんな風に見つめた。彼は僕が傷ついて、泣けば良いと思ったんだ。奴は反応を見たかったんだ。僕は奴をこんな風に見つめて、はい、と言って、彼の方に向かって、さようなら、と言った。それで立ち去った。それは僕が4年間も跪くことになるからじゃない。僕は自尊心があった。あなたはそういう風にしたんですか。そうですか、分かりました。でも僕は憎しみがあつた。僕は、それを出したくなかつたんだ。

結局、大統領恩赦を受けた。全部で3年だ、3年半。その間、いつもちょっと働いていた。アルバイトだよ。すごく良い場所にいたんだ。僕が望んでいたのは、これだ。働いて、家族にたくさんやって、後々のために蓄えて、お金を貯めて、結婚して、子どもをもって、普通の人みたいな生活を送ること。人生とは、何か？ 繁殖だ、子どもを育てることだ。それが人生だ。

*教育は受けた？

ーいいや、気に入らなかつた。高校では、化学専攻だった。化学でバカロレア・レベルまでいったんだ。でもバカロレアを受ける前に止めた。でも仕事を探したから、見つけられたんだ。あっちこっち奔走した。刑務所を出た週に僕は「働かなければ」って思ったんだ。

*仕事探しはどうだった？

ー汗流したよ、でもはっきり言って、探した、探しまくつた。確かに最初は短い契約だったけど、でもこう思ったんだ、どうでもいい、僕は地域（雇用）センターに行ったんだ。そこで「職業訓練がある」って言われた。僕は聞いて、うん、分かつた。僕は一人で何とか切り抜けないといけない。訓練で何をするっていうんだ？ 僕が関心あるのは塗装とか機械とかの訓練じゃない、そんなのどうでもいい。何をするためだ、いったい。時間を浪費するためか？ 僕は時間を浪費したくないんだ。

—僕はセンターを脇にやって、その後続いた仕事は全部自分一人で切り抜けた。センターでは「よく聞いて、化学では何もないんだ。もしよかったら電気関係のものを紹介できるけど」って言われた。僕は「自分のやりたいことを続けたい」と言った。それで去った。一回会ったっきりだ。今じゃセンターでは、厄介者は追い払いたいと思ってるんだから。機械系に人間を送り込みさえすれば良いんだから。彼らは、君が何をしたいかなんて考えようとしない。「他のことをしてしろ」って言おう。イヤだ。僕は、イヤだ！ 彼らが支配していて、僕の頭の中で何を考えているかなんて見ようとしな

いんだ。

—うん。僕はCFI契約（個人訓練契約）をやっている。確かに今のところそれを続けているけど、でも気に入らない。センターを通してやってるんじゃない。刑務所から直接だ。担当者はアラブ人の女性で、すごくいい人だった。僕のことをよく面倒見てくれた。彼女が「何か見つけてあげましょう」って言ってくれた。うん、それは電気で、他に何もなかった。それで「抜けだすためには、やらなくては」って思ったんだ。でも全然気に入らなかった。今のところは訓練を止めてすぐに他の仕事を探すことはできない、もし止めたら、また刑務所で働くことになるだろうから。だから留まるしかなくて、時間をつぶしている（…）。上手く組織されてない。電気では、あるクラス。英語では、また他の人間と一緒に、数学ではまた別。上手くいっていない。右往左往だ。こんにちは、元気、はい終わり。

電気なんてどうでもいい。僕は生物か化学が良いんだ。僕はもう22歳なのに、時間をつぶしている。一生ずっと気に入らない訓練を受け続けたりなんかできない。僕は一生、ちゃんと働きたいんだ、少なくとも自分の気に入るところで。

—ああ、忘れていた…中学3年の終わりに、化学で、クラスで1番だった！ デュシェール（リヨン）のマルチニエール高校の生物学専攻に書類を書いた。高校は僕の書類を受けとった。僕のクラスの女の子もいて、同じ専攻を選んだ。彼女は僕より[成績が]悪かったけど、フランス人だった。その高校は彼女を選んだんだ、僕は選ばれなかった。その時すでに、それはもう、がつくりきた。

—執行猶予は、1994年までだ。でも僕は自分の分野でやっていきたい。あなたがあ

あなたの分野でやっていっているようにね。あなたの仕事（政治科学の博士課程）は、それをやったら、何になれるの？ 若者は、よく世話してやらなければ。分かるでしょう、若者はってっぺんまで行くんだ。クラスに来た人間が「僕は何も望まない、僕は何にも向いていないんだ」なんて言うなんてことがあってはいけない。助けてやらなければ、何が起きているかなんて何も理解できないよ。「僕は何の役にもたない」と思うだろう。自信がまったくなくなって、そこで、そいつは投げ出すんだ。

***君の参照軸は何？**

一家族の中で？ うーんと、父、母、両親だ。今、僕は自分の家に帰る。弟に言うんだ、「宿題やったか？ 今日何を勉強した？」って。それで助けてやる。でも僕にはそんなことすらもなかった。僕は可能性があったし、力もあった。でも何のモチベーションもなかった。両親は最初からよく助けてくれた。でも僕は「高校に行きたくない」なんて言えなかったんだ。だから僕の本当の問題について議論したくなかった。母は「何が起こったの？ ある日突然、あなたが分からなくなった」って僕に言った。それから僕は非行に走れば走るほど、家族とのコンタクトがなくなった。あるいは反対だ、家族とのコンタクトがなくなるほど、僕は非行に走っていったんだ。

***君のご両親はいつからフランスにいるの？**

一僕の父はアルジェリアから来た。向こうで生まれたのは四人。兄と、もう一人の兄と、姉と僕だ。父は先に、様子を見に来ていた。アルジェリアから僕らを連れてきたのは1973年。僕は2歳で、移住は滞りなかった。小学校では一度も落第しなかった。中学では1年目にへまをして、落第した。でもその後、気がついた。両親は僕の尻を上手くたたいてくれた。家でほとんど刑務所にいるみたいだったよ。家で勉強しなければならなかった。小学校は完璧、中学校も。まあ少々の出来事はあったにしてもね…。

一姉は大学では医学部まで行ったんだよ。女の子たちは違うな、僕らんとこでは女の子たちは控えめだ、ものすごく控え目。兄はCAPをとった。兄はCAPをとって、10

年間、父のいる会社で働いた。妹は学校ですごく成績が良かった。女の子たちは成功しなかったら、結婚しさえすれば、うん、それが成功だ。女性は仕事をしていなくても、夫がいるだろう。夫が働くさ。だからこういう現象は女性ではあまりない。でも僕の弟には、僕は注意した「お前があのかっばらいと一緒に歩いているところを僕に見つからないように気を付けろ！」ってね。

—父はサン・フォン[リヨン南部郊外の街]にたった一人で来た。それでそこからヴォー・アン・ヴランに came。僕はここで育った。いや、男の兄弟と姉妹の間にケンカはなかったよ。うん、いや、ちょっとした出来事程度さ。両親と？ 父は読み書きができたし、話もすごく上手い。時々父は降りてきて、若者たちと喋ったりだっけてした。自分の息子でもあるかのように、説教するんだ。(…)

—うん、家族は、僕が刑務所を出たことは受け入れてくれていた。父や母とはちょっと議論をしたよ。父は僕に「お前の将来はどうするんだ？」と言った。僕は言いたいことが分かった。だから、彼にとっては、それで良かったんだ。まあちょっと警戒していたけれど、「刑務所より悪いモノはない」って思っていたんだ。

* ドラッグはやったことはないの？

—刑務所で何度か吸った。でも強いのは絶対にやらなかった、絶対。最初あんまり影響がすごかったから、もう絶対にしないと決めた。

* イスラームは君にとってどんな意味をもっている？

—正直に言って、人生においてとても重大なものだ。それについてもいろいろ考えを巡らせているところなんだ。「僕は宗教をもっていなければならない。お祈りをしなければ」と思う。3, 4日ごとに、コーランの語りを聞かせる所で、イスラームとか西洋の偉大な賢人のカセットを借りてくるんだ。日本の著名な天文学者の一人が、コーランは神の声だと保証したんだ。NASA で一番知識のある人も保証した。そこで語られていることは人間の言葉じゃない。神の言葉でしかない。否定なんかできないん

だ。最も著名な知識人が保証したら、もう否定なんかできない。」

ー [イスラームは] とても重要だ。中学校にいたときもうお祈りをしていて、すごく満足していた。何も悪徳はもっていなかった。うん。神に対しても、人に対しても、何も。お祈りをしている、僕はクラスで一番になれたんだ。お祈りを止めた日に、いろんな訳の分からないごちゃごちゃがやってきたんだ。ラマダンをするのも、お祈りも止めた。それでどこで気がついたかって？ 穴の中だ、刑務所だ。

*なぜ止めたの？

ーそれも同じ、それもおんなじ連鎖だ。悪循環。でも刑務所でも、投げ出さなかった。前はアラビア語を書いたり読んだりではできなかった。刑務所にやってきて、こう思ったんだ、「ここで時間をつぶしちゃいけない。ムスリムの兄弟がいたから、僕はアラビア語を学ばなくては」って。アラビア語を習って、一週間で読めるようになった。うん、本当に早かった。だって好きだから。すごく早く学んでいった。この頃から宗教をもう一度実践するようになった。毎週金曜日にモスクに行く。カセットを見たとき、賢者が喋っていたら、もう否定できない。創造者がいる。偶然なんかないんだ。ひとつひとつのものは、あるべき場にあるんだ。すべてのものが意味をもっている。僕に否定なんかできない。

*出身文化は、君にとっては大切？

ーすごく大切だ (…) アルジェリアには文化がある。サウジ・アラビアにも、文化がある。文化と宗教は区別しなくては行けない。文化と宗教は、何の関係もない。(…) 僕はアラブでもフランス人でもない、僕はムスリムだ。何の区別もしない。もし今、フランス人がムスリムにならなければならないとしたら、彼は僕と同じだ。今モスクへ行っごらん、フランス人がいっぱいいる。人種の区別なんかもうない。モスクに入ればすぐに落ち着いた気分になれる。人びとはあなたと握手をして、昔から知っている友人みたいに思ってくれる。警戒も、あらゆる偏見もない。道で誰かに「こんにちは」と言ったら、「なぜあなたは私にこんにちはと言うのですか？ 私はあなたの

ことを知りません！」と言う。僕は道でムスリムを見かけたら、「サラマレクン（神のご加護を）！」と言う。彼は満面の笑顔で僕を見て、僕らは立ち止まって話を始める。他者の承認だ、知り合いでなくても兄弟なんだ。

—こういう若者もいる、僕はアラブで、ムスリムでもフランス人でもない、って。気を付けないといけない。両方で人種差別を形成している人もいるんだ。フランス人に対してめちゃくちゃ人種差別的なアラブ人もいる。彼らには死が値する、それは避けられない。本当だ、こう言うやつがいるんだ、「僕はフランス人じゃない、僕はアラブ人だ」って。アジア人だろうが黒人だろうが、赤かろうが、ムスリムだったら僕らは皆兄弟だ。団結だ。今、あなたたちにヨーロッパがあるみたいに…。彼らは何をしたいんだ？ 団結したいんだ。なぜ？ 力をつけるためだ、ムスリムだったら同じだ。イスラームの最初の土台は、団結だ。「世界中がイスラームの第一の土台、団結をとれば、地上に貧困は存在しない」って言っているカセットを見た。

***時間は、君が生きてきたことのなかでは重要？**

—時間、時代？ 確かに、フランス人でももう子どもを敢えてつくろうとしない人がいる。だって彼らは将来が怖いから。「すでに自分たち大人でも切り抜けていくことができないのに、子どもは後になってどうやって生きていくんだ？ 子どもを養わなくちゃいけないし、地位を見つけてやらないといけない」彼らにとってすら、もう確かじゃないんだ。将来なんて、誰にとっても確かじゃない（…）。

蝶々みたいなもんだ、ある日生まれるけど、そいつにとってはその一日が一生なんだ。

***君の余暇は何？**

—余暇なんてない。個人的には今は、僕に会社とかなんとかのことは話してはいけない。クラスでさえ居場所がなかったんだ。会社なんて想像してみろよ！ カセットを見る。カセットを借りて、ビリヤードをして、街へ行く。ちょっと一周して、ナンパする。親切な人がいるところを探そうとするんだ。僕は個人的に、人が集まっている

ところは見つめない。バーの人が親切に対応してくれたら、2、3日後にまた行く。自分のお金は、僕を斜めから見ない人にあげたいからね。だから感じの良い小さいバーを探そうとしているんだ。

* ヴォー・アン・ヴランとリヨンでは違いがある？

—あるとも！ 冷たさだな。メトロに乗るだろ。僕の真横に鞆を置くやつがいるんだ。ムカつくんだ、それが、ムカつくんだ！ 仕事を探しに行行ってヴォー・アン・ヴランに住んでいるって言ってごらん、名前なんか言わないんだ。すぐさま直ちに、だ [断られる]。

* 街と郊外の違いは大きい？

—ああ、格差がありすぎる、大きな壁がある、とてつもなく大きな壁が。街に行くために郊外を出た人間は、斜めに横切ろうとするし、小さくなっていようとする。街で集まっていたりしたら、注目されること請け合いだ。大勢でバーに入ったりしたら…フランス人は大勢でバーに入れる。でも僕らは、七人とか八人とかで入ろうもんなら、バーの主人は気が狂ったみたいになるさ。僕にとって、ここを出たら、もう自分のところではないんだ。

* ヴォー・アン・ヴランを出たい？

—僕には、ひとつしたいと思っていることがある。フランス全体から去るんだ。ああ、永遠にね。どこへ行くかって？ うん、僕んとこへ帰るんだ、アルジェリアへ。ここには僕の居場所はない。なぜって、今となったら、雇用主が情報収集するだけで事足りるんだから。こいつは刑務所を出てる、って。その会社で盗みがあったとしたら、それをやったのは僕になる。時々、クラスで計算機がなくなったんだ…僕は盗み人じゃない、何もしてない。でもたった一人のアラブ人だから、僕は「みんな僕がやったと思っているに違いない」と思って居心地が悪かった。それに無遠慮な視線で見られるし。僕は「いったい僕はここで何をしているんだ？ ここでは人は僕を受け入れないんだから、僕はここには何も関係がないんだ」と思った。

* 本当にある日フランスから立ち去ると思うの？

— インシャッラー⁽²⁾、もし神がお望みになれば、きっとフランスから出るさ。

[ハレド・ケルカルは友人の一人とヴォー・アン・ヴランの若者の活動について会話をする。ハレドはイスラームの話題にもどり、西欧人が抱いている「ネガティブなイメージ」について話す] 彼らはいつもイランのことを考えるんだ。でもそれって何千キロも離れている、全然関係ない国のことだぜ！ 僕らは、イランとは何の関係もないんだ。やつら [イラン人] は、教条主義者だよ、根っからの！ それにあいつらはムスリムですらない、なぜって、彼らはモハメッドが預言者だともいわないんだから。イラン人は、預言者はアリーだというんだ、モハメッドの甥の。それは違う。そう言うことは、神が嘘をついているというのと同じだ。シーア派はユダヤ人によって創られたんだ。なぜなら、その当時、ユダヤ人は迫害されていたものだから、死ぬのが怖かったんだ。ユダヤ人が何を創り出したかって？ 一種のセクトだよ、シーア派って言う。それでアラブ人と同化しようとしたんだ。その時から彼らはもうムスリムじゃない。

シーア派はムスリムじゃない。よく学べ、よく見ろ、コーランをよく読め。賢者がいつているじゃないか。神は「コーランの中に欠陥を見つけた人間は欠陥を見つけるだろう」といつている。日本のもっとも偉大な教授が手を挙げて、アラーは神で、モハメッドはその預言者だったといつたんだ。なぜかって？ なぜなら、彼はよく研究をして知っていたからだ。世界で最も偉大な知識人たちがそういつたんだ、確かだ。

* 地域の若者のための出会いの場所なんてあるの？

— 特定のひとつの場所に集まるってことはない (…。) ただ集まっているだけで、人は言うんだ、「見ろよ、やつら睨んでるぞ、アラブ人が集まってるぞ」って。だから僕らにはそんなことできない。良いだろうな、田舎の若者がやってるみたいに、市役

(2) 「Inch'Allah (インッシャッラー)」は、「もし神がそう望むなら」という意味。ムスリムにとって未来の自分の運命はすべて神が決めることであり、自分には未知であるという意味で、不確定な将来や約束ごとについて話す時によく使われる言葉である。

所前の広場で集まって、議論したり、大声で歌ったりして、でも人は何もいわないで、ふざけていられるなんて。でも僕らがそんなことしようものなら、人はふざけてなんかいないだろう。(…)僕の年代の誰も団体には入っていない。僕が知ってる、地区の誰も。ここで耳にするただ一つの団体っていうのは、モスクのことだ、モスクの団体。僕らの所までやってきて、話をするのは彼らだけだ。彼らはいろいろ僕らに提案する。「君に強制したりはしない。私が君に話をしたのだから、今、選択するのは君だ。」団体ってのはこういうもんだよ、足を運んで僕らを探しに来るのは彼らの方だ。「そこに留まっているより、モスクにおいて、来て学びなさい、あなた方のためになることでしかないんだから」。

* ヴォー・アン・ヴランの政治についてどう思う？

—偽善的な政治…半分くらいの間人は、もし県会議員選挙は何だと尋ねられたって、知らないだろうね。地方議員選挙？ 知らない。国民議会議員選挙？ 知らない。で、どうやって若者たちが投票に行けるっていうんだ？ 自分の街では、市役所がクソまみれだってことはもう彼らは知ってるんだ。そいつ[候補者]のことを知らないのに、どうやってそいつのために投票に行けるっていうんだ？ (…)ヴォー・アン・ヴランを守っているのは店主たちだ。彼ら、警察を持ってるんだ。店主の自衛団があるっていう話だよ (…。警察が「あなたたちが自衛するなら、自衛しなさい、彼らに向かって撃っても、こちらではどうでも良いことです」っていつているらしい。

—僕は政治に関心があって、よく追っていたけど、あんなのバカげてる。もちろんヴォー・アン・ヴランの生活に関心があるさ、でも、市長ときたら、あんなのブランドのイメージだけだ。彼が守りたいのは自分のブランドのイメージ、それだけ。ヴォー・アン・ヴランはいつも貧困の中だ。彼らが「マ・ドゥ・トロをたて直そう、ブランド・イメージだから」っていった時。やつらは何の面倒を見てるんだ？ 物質的な問題だ。若者との対話だって？ 市長は「毎週金曜の午後に若者は私に会いに来る権利がある」っていつている。若者がやってきたって、市長はいたためしがない。約束を取り直しなさい…二回、三回来て、もううんざりだ。若者たちは、あいつは嘘つき

だ、っていつている (…)

—もし今、僕がヴォー [・アン・ヴラン] にアパートマン [公営住宅] を手に入れようとしても、それは不可能だ。給料明細を持っていて、3年経験があるかどうかによるんだ。書類を出して、1年かそれ以上待つて…。でもフランス人カップルは先に通るんだ、それは火を見るより明らかだ。やつらは、アラブ人なんかよりこういう住民を入れたいんだから (…)

—僕には何の権利もない。僕が今、道端にいて、誰かが僕に暴力をふるって、僕が自己防衛したって、正当なのはやつの方で、間違ってるのは僕の方だ。それはきっとそうだ。僕はもう刑務所を出るんだから。スキンヘッドの集団が来て僕に暴力をふるって、僕が正当防衛をしたって、[刑を] 食らうのは僕の方だ (…)

***君自身の子どもはどうやって育てるつもり？**

—僕にとって、西欧人は敬意なんて持っていない。僕は兄の前で絶対タバコなんか吸えなかったし、吸うのが恥ずかしかった。それが敬意だ。女性と一緒に外出するなんてできなかったし、家に連れてきて、両親の前で彼女を抱擁するなんて、不可能だろうし。両親の前で自分の妻を抱擁することが、自由だって？ いや、それは敬意が足りないんだ。両親と一緒にポルノ映画を観てるやつだっている。そんなの恥だ、敬意が足りない。やつらは宗教を侮辱する。ムスリムである僕にとって、キリスト教は、誤った宗教だ。なぜなら、毎年、聖書の新しい版が出るだろ (…)。僕は、人びとがしているようには僕の子どもを育てることはできない。そんなの不可能だ。両親は僕らに教育を与えてくれたけど、同時に、フランス人は僕らに違う教育を与えた、彼らの教育をだ。一貫性がないんだ。ちょっとだけこれと、ちょっとだけそれと、ちょっとだけ、あれ。違う、僕には個人的には、原則と敬意があるべきなんだ。もしそれがなかったら、すべてが崩壊してしまう。

***君の地区の将来についてどう思う？**

—アメリカだと思う。こんなのは始まったばかりだ。もっと熱くなって、そして手遅

れになる。職業バカロレアを取得したばかりのやつを知っているけど、そいつはよく働くやつで、すっごくモチベーションも高いんだ。学校を出たばかりで、失業している。そいつが「自分の分野で働きたい」っていうんだ。やつが何を提案されたと思う？ 仕事…トラックの積み荷作業だよ。僕はトラックの積み荷作業をするために勉強したんじゃない。ボイラー製造の BTS 資格⁽³⁾をとったやつを知っている。資格を取っても、仕事がない。そいつが「自分の学位は何の役にも立ってない」って僕にいったんだ。盗みに入って、2年間の刑務所行きだ。なぜか？ やつに仕事がなかったからだ。承認が…。

*君に何か計画はある？

一僕は、インシャッター、僕の国に帰って、何か立ち上げたい。ちょっと働いて、ちょっとしたお金を蓄えるんだ。僕はこの人たちに頼って生きたくない。小さな商店か、何か自分のものを開くに足りるくらいのお金を貯めたら…。働いたら、食う。働かなかつたら、腹ぺこだ。それだけ。すべては僕次第で、他の誰かのせいじゃなくなるだろう。

【解題】

2001年にアメリカで起こった国際テロ事件では、フランス出身の若者が容疑者の一人として裁判にかけられたことが知られている。またフランス国内では、2005年秋、郊外の社会的に排除された地区に住む若者たちが、大規模な「暴動」を起こした。郊外の若者と警察との対立は、今やフランスの日常風景と化しており、1980年からこうした衝突がしばしば起こっていた。だが、このような衝突が「暴動」と呼ばれるようになったのは、1990年にリヨン郊外の街ヴォー・アン・ヴランのマ・デュ・トロ地区で、激しい衝突が起こった後だと考えられている。⁽⁴⁾ケルカルはヴォー・アン・ヴランの出身で、語りでもこの時の若者たちの心情を伝えている。

聞き取りが行われた1992年に22歳だったケルカルが生きたのは、1990年代半ばまでのフ

(3) BTS 資格は、「上級技術者免状」で、中等教育終了後に進学する2年間の上級技術者養成課程において取得することができる。

(4) Le Goaziou, Véronique et Laurent Mucchielli, 2006, *Quand les banlieues brûlent... Retour sur les émeutes de novembre 2005*, Paris : La Découverte.

ランスである。それから10余年の時を経てなお、ケルカルの語りは、私たちに多くの示唆を与えてくれる。中学まで優秀な成績を修めていた彼は、果たして、フランス社会に「統合」されていたのだろうか。それにもかかわらず、なぜ、連続テロ事件の容疑者になったのだろうか。どこから、どのようにして？

1995年夏、大統領選のキャンペーンで沸くフランスは、同時にテロの恐怖に怯えていた。当時、フランスの旧植民地アルジェリアで、イスラーム原理主義政党が大勢を占めた1990年選挙以後、原理主義政党と軍部との間で激しい内戦が行われていた。アルジェリア出身者を多く抱えるフランスでは、この内戦が飛び火するのではないかと危惧されていた。

7月、パリ北東部の有名な「アフリカ市場」のあるグット・ドール地区で、「穏健派」として知られていた、モスクのイマームが射殺される。これを端緒に、フランス全土を舞台として連続テロ事件が発生した。7月25日には学生街として知られるサン・ミッシェルの地下鉄構内で、ガスボンベを改造して作られた爆弾が爆発、8人が死亡、数十人が負傷する。8月17日には凱旋門のあるシャルル・ド・ゴール広場で、釘を詰めて作ったガスボンベが爆発、17人が重軽傷を負った。さらに9月3日には、TGVのパリーリヨン間の線路に時限爆弾が仕掛けられているのが発見される。9月3日には、パリ15区リシャール・ルノワール大通りの市場で、店先の商品に隠されていた爆弾が爆発。翌4日には、パリ15区の公衆トイレでも爆弾が発見された。その爆弾は、前日の市場の事件と同時刻に爆発するよう仕掛けられていた。また9月7日には、ユダヤ人中学校近くで乗用車が爆発したが、終業時間のわずか10分前で、危うく大惨事を免れた (*Le Monde*, le 18 octobre 1995)。フランス中が、テロの恐怖に怯えた夏である。

ところが9月になって、パリーリヨン間の線路で発見された爆弾に残っていた指紋から、リヨン郊外のヴォー・アン・ヴラン出身の青年ハレド・ケルカルが、容疑者として指名手配される。フランス全土で3週間にわたる「容疑者狩り」が始まった。ケルカルは逃亡の末、リヨン郊外の森に潜伏しているところを800人の警察と機動隊に追跡される。3日目の夕暮れ、森を離れて立っていたバス停で、住民の通報を受けた追跡隊に発見される。ケルカルの発砲に追跡側も発砲し、彼は地面に打ち倒され——たまたま取材に来ていたテレビ局のカメラがその場面のほとんどを撮影しており、後に公開された映像は大きな議論を呼ぶことになるのだが——倒れ込んでなお、右手の銃を一瞬、微かにもたげようとする。その瞬間、機動隊の誰かが「そいつの息の根を止めろ！」と叫び、とどめの一発を放った。

ケルカルは、一連のテロ事件の容疑者として死んだ。だが、彼はあくまで容疑者であり、犯人と確定したわけではない。ケルカルの葬儀がリヨンで行われた日、再びパリで爆発があり——そこは、ケルカルが射殺された場所とまったく同じ名をもつ地域だった——、その

後、主犯格の人物が逮捕される。⁽⁵⁾ケルカルと事件との関わりも、裁判を通じて明らかにされるはずだった。一連の事件は非常に残虐な連続テロ事件であり、複数の尊い人命が失われた。とはいえ、「法治国家」たるフランスで、裁判もなしに容疑者が射殺されて良いものか。そのことは、大きな議論になった。そしてフランスに住むアフリカ大陸出身の移民や若者たちは、ケルカルの死の衝撃を胸に焼き付けることになった。

ロホガル・モンドに発表したこのインタビューは、フランス中を震撼させた凶悪な連続テロ事件の容疑者が、当時のフランスならどこにでもいるような青年であることを明らかにして、世論を驚愕させた。しかも、彼は2歳で入国して、フランス共和国の学校教育を受けて成長したのである。ところが、進学した優秀な高校の環境に馴染めなかったことがきっかけとなって、彼は自分を受け入れてくれる集団の方へと引き込まれていってしまう。そして刑務所では「自分の言葉」であるアラビア語を熱心に習得し、イスラームの教えを取り戻す。

ケルカルのその後の人生を考えたときに読者が受ける衝撃にもまして、この記録は、ライフストーリー・インタビューとしても秀逸である。Bertauxは、ライフストーリー・インタビューの手引き書のなかで、この聞き取りを題材として採りあげている。⁽⁶⁾そこでは、インタビューの中で繰り返し語られる言葉を「鍵概念」として、語り手の「転機」を読み解くことが課題となっている。フランス社会における彼の地位はどのようなものだったのか、また、現在にも続く移民やその子孫たちの地位は、どのようなものなのか。私たちは、ケルカルが繰り返し語るひとつの言葉に、その答えを解く鍵を見いだすことができるだろう。

先述のように2001年の国際テロ事件にも、フランス出身の若者が関わっていたことが分かっている。テロの犠牲者と「もう一人のケルカル」が生み出されないようにするには、どうすればよいか。私たちはその問いを新たにしつつ、ケルカルの語りに繰り返し耳を傾ける必要があるだろう。

(5) 1995年の連続テロに関して総勢24名が逮捕され、主犯格の二人は2002年に終身禁固刑の判決を受けている。

(6) Bertaux, Daniel, 1997, *Les récits de vie : perspective ethnosociologique*, Paris : Nathan.